

「美しい」の教育

—図画工作の授業を通しての調査—

安 藤 聖 子

1 はじめに：授業「図画工作」と「美しい」との関わり

「図画工作」の授業は、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士の資格を取得しようとする学生にとって、白百合女子大学では必修で学ぶ授業である。特に小学校教諭の資格取得を目指している学生にとっては、「図画工作」の単位取得した後に初めて、教科教育法である「図画工作科教育法」が受講できた。「図画工作」は「表現活動」や「造形活動」の基礎科目である。内容は「表現」、「造形」、「鑑賞」の基礎学力をつける授業である。

日本では、画用紙、折り紙やクレヨンなどの材料は、子どもにとって、ごく身近な材料である。「表現活動」や「造形活動」は、保育園、幼稚園、学校の中にあって特別に準備される活動だけではなく、日常生活の中に子どもとともにある。様々な材料は量販店でも簡単に購入することができるし、名画の複製は子どもの周囲にあふれている。

しかし、世界の国々を見たとき、小学校と中学校で、「図画工作・美術科」が必修授業として全ての子どもたちが学ぶのは世界のほんのわずかな数カ国である。日本の子どもたちは、明治19年5月25日に発布された文部省令の「小学校ノ学科及其程度」¹によると、尋常小学校では、「図画」か「音楽」が土地の状況によっては「選択」され、高等小学校では「図画」は「必修」であった。明治40年の小学校令では、高等小学校での「図画」は週3時間の「必修」であった。このように、学制発布の頃から図画の「必修」の考

え方は今の時代まで連綿と続いている。過去にはあった「選択」についての中教審での議論も、今回は俎上に乗っていない。

世界には、義務教育課程で「図画工作・美術」の授業の無い国が多くある。1970年大阪万国博覧会を記念して始まった、文部科学省、外務省が後援する「世界児童画展」では、2015年には150を超える国や地域から、2万5千を超える応募が大使館を通してあった。幼児や児童の応募作品の殆どが、絵のアトリエであったり、小学校の選択授業や専門課程で制作したものだったりする。

他方、5万を超える日本の子ども達の作品は、幼稚園、保育園、そして小学校から、全園、全校あげて応募されたものである。つまり、保育園、幼稚園、小学校が、表現活動の活動場所となっているわけである。

そういう子どもたちを育てることになる本学の殆どの学生たちは、日本の教育制度の中で、保育園時代から18年間、短い学生で小学校、中学校の必修授業の9年間にわたり「表現活動」「造形活動」を体験している。学生達は、旧、もしくは現行の学習指導要領により、9年間の図画工作・美術の目標を達成していると考えられる。

現行の平成20年3月告示の「中学校学習指導要領」が定める第2章第6節「美術科の目標」は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」である。それに対し、平成20年3月告示「小学校学習指導要領第2章第7節図画工作第1目標」は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びをあげようようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」である。この両方に含まれる小学校と中学校共通の目標の「豊かな情操を養う」とは、「図画工作科解説」によると、「情操とは、美しいものや優れたものに接して感

動する、情感豊かな心をいい、情緒などに比べて更に複雑な感情を指すもの」とされている。

そして、図画工作科によって養われる「情操」は、次のようになっている。

よさや美しさなどのよりよい価値に向かう傾向をもつ意思や心情と深くかかわっている。それは一時的なものではなく、持続的に働くものであり、教育によって高めることで、豊かな人間性をはぐくむことになる。²

つまり、図画工作・美術科の目標とする「情操」は、「よさや美しさなどのよりよい価値に向かう傾向をもつ意思や心情と深くかかわっている」と定義されている。これは、「美しいもの」や「優れたもの」に「感動する心」と言い換えることもできよう。

保育士や教師を目指す学生達は、小学校と中学校時代に図画工作や美術の授業を学ぶことで、「美しいもの」に感動する「豊かな心」を育んでいくと想定される。そして、現在、大学生として、それらの基礎能力の上に大学での「図画工作」学んでいるわけである。そこで、本論著者は、これまでに育まれたその基礎的な情操を基に、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭として幼児・児童の「表現活動」や「造形活動」を通して、これから接する子どもに「豊かな情操」を養うことが求められていることを自覚させるため、「美しいもの」をどのように考え、理解しているかを調査した。以下は、その調査報告と分析である。

2 こどもの保育・教育・指導における「美しい」：「美しい」「美」はどのように扱われているか。

213ページにおよぶ平成20年4月作成の「保育所保育指針解説書」では、10カ所に「美」という文字が出てくる。具体的には、領域「表現」の中ではなく、領域「環境」で多く扱われている。³

領域「環境」では、「第1章（総則）」「3. 保育の原理」中の「(1) 保育の目標」にある「(エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情やの芽生えを培うこと」、さらにこれをより具体化した、「保育のねらい」として「ウ 環境」「(イ) 内容」「③ 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」と表現されている。直接、自然と触れ合う中で、自然に驚いたりその変化に気付かせたりして、美しさに感動させるためには、子どもの保育に関わる大人が感動し、「美しい」という概念を、声や表情で表現して見せなければ子どもたちは、「美しい」という言葉と、状況を学んでいくことができない。例えば、様々な花の色を絞って色水を作るときに、沖縄の子どもたちは、南の明るい色の花々で色水遊びをするのと、北の国々の花で色水を作るのでは、色に対する驚きや、美しいという思いは違ってくる。沖縄では一部の地域を除き、ドングリの実をつける木が無い。ドング리를 散歩のついでに見つけたり、拾ったりする経験はできない。ドングリの帽子をかぶったユーモラスな形がたくさん落ちていて森の小道を埋め尽くしている状態を美しいとすることはできない。ドングりで工作をして遊ぶ活動をすることは難しいのである。保育士が、自分が「美しい」と思った秋の森の様子を伝えなければ、子ども達には、木の葉の色が変わり、ドングりが実をつけている様子は伝わらないということである。

領域「表現」では、「第1章（総則）」「3. 保育の原理」に中の「(1) 保育の目標」の「(カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、

創造性の芽生えを培うこと」を具体化している。

ねらい

- ①いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。⁴

この領域「表現」でのねらいは、平成20年3月告示「幼稚園教育要領」でも文言を合わせている。①の「いろいろな物の美しさ」が「幼稚園教育要領」の「2章ねらいと内容」「表現」「1 ねらい (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」と「物」が「もの」とひらがなになっている。⁵「持つ」と「もつ」も違っている。「物」は形のある「物質」を指すが「もの」はさらに広い範囲を表し、抽象的なものも指し示す。また「持つ」も、形のある物を「持つ」であるが、「もつ」は抽象的な動作を表すことができる。「3 内容の取り扱い」では先に述べたように、「教師が感動したことを共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること」と書かれている。

『幼稚園教育要領解説』は215ページあり、その中に「美しい」「美」は25カ所出てくる。『保育所保育指針』と大きな違いは、「自然」に対する認識の違い、「自然」に触れさせ「自然」の美しさをどのように受け入れ、豊かな感情を持たせることができるかを分析していることである。特に「自然への畏敬」は、小学校、中学校での特別の教科「道徳」の内容項目3の、「主として自然や崇高な物とのかかわりに関すること」小学校1, 2年生を例に取れば、「美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ」につながる価値観である。これらの価値観は、保育士や教師が作らなければならないということとを常に「図画工作」の授業で当該の学生に意識させなければならない。

また、教師が「美しい」を意識的に、幼児、児童、生徒に伝えるときに、明快に指示されている文言が、「平成20年3月告示小学校学習指導要領 第2章第7節 図画工作」中の「第2各学年の目標及び内容」に示された「第5学年及第6学年 2 内容B鑑賞」にある。

(1) 親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する。

ア 自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取ること。⁶

ここでの「よさや美しさを感じ取る」とは、今までの見てきたことであり、友達の作品や、親しみのある美術作品とは、小学校5、6年生でも知っている、例えばゴッホやピカソの絵、ダビンチの「モナリザ」、日本の写楽や北斎の作品などが考えられている。小学校の図画工作の教科書にも、それらの作品は掲載されている。暮らしの中の作品は、ポスターや工芸品、食器や家具などのことで、生活の中にそれがあることで、同じ機能を持つものであっても豊かな気持ちで過ごすことができるものである。

学習指導要領の解説では「ここでの美しさは、他者や社会の関わりが広がる高学年の発達に応じたもので、多くの人々が共有している美しさの感覚やそれにまつわるエピソードなどを含むものである」と書かれている。幼稚園児や保育園児が、保育士や教師と生活の中でふれ合う「自然の美しさ」に共感して、「美しい」を獲得していくようにし、小学校高学年の子供たちには、今まで多くの人々が美術作品や、生活の中で、「美しい」と評価が定着しているものを鑑賞する中で、「美しい」を広げ深めていく。小学校3、4年生では「よさや面白さ」を感じ取ることとなっており、「美

しさ」の感覚を会得することは、発達を考慮しなければならないことであることが分かる。

現行の中学校学習指導要領では、1年生の目標に、「美しく表現する能力を育てる」とある。また鑑賞の目標が、1年から3年まで、「よさや美しさなどを味わう鑑賞の能力をたかめる」とある。ある美術館の学芸員が、鑑賞の授業で中学生を自分の美術館に迎えるにあたって、考えることがあった。その美術館の収蔵品を代表する作品はグロテスクであるという定評があったが、中学生にとって、それを見せて美術館での授業を行って良いのかということであった。中学生が、友達や家族で美術館に行ってその作品を鑑賞するワークショップならば、それを鑑賞するかどうかは、中学生や親の判断に任されている。しかし授業として、全員の生徒が鑑賞するのであれば、「多くの人々が美しいと共有している美しさの感覚」を尊重することが鑑賞授業の目標になる。あえて、授業でその作品の鑑賞をさせることについては、鑑賞の授業の目標から外れることになるのである。この場合の「美しい」は、「多くの人々が美しいと共有している美しさ」とあるように、「美しさ」に「多くの人々」との「共有」という縛りが出て来るのである。

「美しい」は中学生の場合、求められるのは鑑賞ばかりではない。教員が中学生に「何でも作っていいよ。描いていいよ」と言う場合もある。しかし、中学1年生の目標に、「美しく表現する能力を育てる」とあるので、多くの人々が、「美しい」として共有できる感覚のものを表現する能力を育てなければならないのである。中学2、3年生はすでに学んだ能力を活用して表現するのであるから、中学生はいつも「美しく表現させる」ように指導しなければならないことになる。

3 実態調査：「美しいもの」「美しいこと」

以上述べてきたように、本学の学生達は、9年間の義務教育の教育課程の下で「美しい」と感じる心を育て、これらの能力を身につけて大学生になっているはずである。本学の学生達にとって、様々な場面や様々な事象を見て「美しい」ととらえる力をつけていることが、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭として将来必要とされる資質なのである。音楽の授業を受けて、ピアノの弾き歌いができるようになり、子どもたちが楽しい園生活や小学校での学習ができるようになるように、図画工作の授業で「美しい」と感じる心をさらに研ぎ澄まし、子供たちと共感し合い、多くの人々と共有することができるようにならなければ、大学で、教員や保育士としての資質向上の授業ができたとは言えないのである。では、実際に学生はどのようなものを、「美しい」と認識しているのだろうか。

筆者の調査（2015年実施）では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭免許状取得予定の67人が、10項目の「美しいものやこと」を書き出した。そして、10項目が思いつかない学生も10人いた。

自然

- 「海」17／「沖縄の海」5／「きれいな海」2／「荒れていないときの海」1
- 「夕焼け」14／「夏の夕焼け空」1／「駅から見る夕焼け」1／「夕焼け空」1／「日が沈む景色」1
- 「虹」13／「雨上がりの虹」1／「プリズムを見たとき」1
- 「星」11／「星空」4／「オーストラリアの星空」1／「暗闇の中の星」1／「空」11／「青空」5／「空気が澄んでいる星空」2／「空の変化」1／「晴天の空」1／「赤からオレンジのグラデーションになった空」1／「晴れて雲が高くにある空」1／「晴れた日の青空」1／「雲ひとつ無い青空」1／「飛行機雲」1／「水たまりにうつる空」1／「朝が始まる前、

冬から春くらいの澄んだ日の紫のような赤いような青いような空」1／
「雲の無い空」1／「晴天」1／「空（晴れの日）」1／「初日の出」1／「夕
日」3／「太陽」1

●「自然」6

●「満月」4／「月」3／「大きな満月」1

●「光」4

●「川」3／「滝」1／「水」3／「水の動き」1／「水の中」1／「きらきら
光る水」1

●「朝日」2／「森林での太陽の光」1／「木漏れ日」1／「飛行機からの朝
日」1

●「葉っぱに水滴が付いていたとき」2／「雨が降った後に草につく滴」1

●「木々の木漏れ日」1

●「ウユニ湖」2

●「宇宙」2

●「雪景色」2／「足跡の無い雪が積もったところ」1／「雪」1

●「葉っぱ（雨に濡れて上がったとき）」1／「お日様が透けている葉っぱ」1

●「富士山」1／「修学旅行で見た富士山」1／「山」1

●「雲」1／「大きな雲」1

●「珊瑚礁」1／「海岸の白い砂」1

●「広い道」1

●「地球」1／「オーロラ」1

●「泡」1／「空気」1

動植物

●「花」9／「あじさい」3／「川端に咲いた菜の花」2／「なの花畑」1／
「きれいな色の花」1／「色鮮やかな花」1／「百合の花」1／「草花」1

- 「森林」3／「学内の森林」2／「木」2／「新緑」1／「紅葉」1／「紅葉した銀杏」1／「秋のもみじ」1
- 「植物」1／「こけ」1
- 「高尾山のたこ杉」1
- 「多摩川で見たカワセミ」1
- 「猫」1／「犬の瞳」1／「馬の毛並み」1
- 「人」2／「端整な顔立ちの人」1

もの こと

- 「花火」11／「透き通ったガラス」1
- 「夜景」9／「横浜の夜景」1
- 「イルミネーション」7／「表参道のクリスマスイルミネーション」1
- 「色」7
- 「絵画」4／「日展で見た作品」1／「美術館の絵画」1／「レンブラントの夜景」1／「たくさんのペンライト」3
- 「ビー玉」2／「ガラス」2／「ステンドグラス」2／「ガラス玉」1／「ビー玉」1／「透き通ったガラス」1／「風鈴」1
- 「宝石」1／「真珠」1
- 「グラデーション」1
- 「ハイビジョン映像」1／「画質」1
- 「球場の俯瞰図」1／「屋上からの景色」1／「東京タワーからの景色 動物の写真集」1
- 「世界に4人しかいないタイコースブルーの瞳」1／「日本人の瞳」1／「薔薇のアーチ」1
- 「着物」1
- 「京都の和菓子」1／「和菓子」1／「盛りつけの素晴らしい食べ物」1

- 「サラダの盛りつけ方」1
- 「彫刻」1／「マスカレードの仮面」1
- 「文房具屋にペンや色鉛筆が並んでいるところ」1
- 「シャンパンタワー」1
- 「陶器」1
- 「古い建築物」1／「田舎の風景」1／「海外の町並み」1／「フランスの町並み」1
- 「電車の先頭車両からの景色」1／「雨があがった後の風景」1／「京都」1／「高いところからの景色」1／「白百合女子大の景観」1／「雨の日の傘を差している人を上から見たとき」1
- 「東京タワーからの景色」1
- 「白百合のクリスマスツリー」1／「クリスマスツリー」1
- 「ドライアイス」1

☆周りから言われて「美しい」と気付いた例

- 雨上がりの後、蜘蛛の巣に滴が付いているのを友達に言われて、きらきらしてきれいだと思いました。
- 弟が春の終わりに携帯のカメラで撮ってきた色鮮やかな夕焼け
- 小さい頃にきれいだと言われて気付かされた夜景
- 道ばたの咲いている花をきれいだねと言われて好きになる。
- ぱっと見て何が描いてあるのか分からない芸術作品を周りの人が「美しい、きれいだね。」と言って知ることがある。

4 まとめ：学生の変化の追跡

音楽の授業でピアノが弾けるようになるのと同じように、図画工作の授業では、「美しい」と思える心を育てることがその目的となる。具体的には、

「美しい」を言語化する機会を増やすことであると考え。以上、何を指して「美しい」ととらえるかが問題ではあるが、「美しい」と感じたことを言葉にのせて、相手に伝えることが重要であると述べてきた。子ども達は「言語化」した感情を共有して、「美しいもの」を獲得していく。その「言語化」できる力を獲得したとわかるには、実際に目にする「美しい」が何か、それはどこにあるのか、その色、形、そしてイメージがどのようなものかを説明をできるようになったときである。

小中学校で学ぶ図画工作・美術の教科の目標は、「豊かな情操」を養うことであると、学習指導要領に書かれている。筆者は、平成10年度学習指導要領解説書の作成に関わり、協力員であった。実際にその学習指導要領と、次の改定の学習指導要領をもとに学んだ学生を大学で教えることになった。その際、担当した学生たちが、本当にこの目標を達成して大学生になっているのかと、ふと疑問が湧いた。

実際、この目標が達成できていることを前提に、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭になるための学びが設定されている。しかし、その基礎力とは何であろうか。そもそも大学生が、資格を取るための学びの基礎力を、抽象的な言葉を基に具体的に計測できるのだろうか。こうした疑問に答えるために調査を実施し、本論のようにまとめた。そして、その調査のキーワードは、「美しい」「美」を使った。それは、子ども達への指導のよりどころになる『学習指導要領解説 道徳編』『学習指導要領解説 図画工作編』『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』で使用されているからである。

学生が感じている「美しい」は「動植物」を含め、「自然」に関わるものがいかに多いかがこの調査から読み取れた。「自然」の美しさは、『保育所保育指針』の大きな部分を占めていた。保育園が対象とする子どもは、0歳からである。つまり、「美しい」を感じさせ、言語化させていくための言葉かけは、誕生時から始めることが重要であることが述べられている。

子どもには年齢的な発達があり、感じる心や発語の発達も、一人ひとり異なっている。そして、子ども達一人ひとり、言葉や行動を外在化しなくても、様々な感じ方や言葉を内面化していると考えられる。その程度は、子どもによって多様であり、保育者や教師をじっと観察し、ひたすらインプットに努めている。子どもは、あるとき突然、それを外在化していく。

今回は67名の学生の調査であったが、周りから言われて「美しい」と気付いた例の中に、保育士や教師に言われて気付いたという事例が出てこなかった。表現活動をするときに、子ども達にとって最も身近な保育士や教師が「美しい」を気付かせてくれたものが対象として出てくるようにするために、「図画工作」の中で造形活動を行い、基礎学力を学生につけることが必要である。

学生の調査内容の「美しい」に対する分析はこれからになるが、学生達の現状の理解状況は把握することができた。今後、さらに「美しい」をどのように感じさせることができるか、何を「美しい」と思わせるか、対象の発達に合わせた分析を行い、保育園児、幼稚園児、小学生、中学生に十分な指導ができるよう、学生指導のあり方を研究課題としたい。

注

- 1『学制百年史 文部省』（帝国地方行政学会、昭和47年10月1日）、89～90ページ。
- 2『中学校学習指導要領解説 美術編』（文部科学省、平成20年9月）、6ページ；『小学校学習指導要領解説 図画工作編』（文部科学省編、平成20年8月）、5ページ。
- 3『保育所保育指針解説書』（厚生労働省編、2008年、2013年）、80ページ。
- 4 同書、96ページ。
- 5『幼稚園教育要領解説』（文部科学省編、平成20年10月）、158ページ。
- 6『小学校学習指導要領解説 図画工作編』（文部科学省編、平成20年8月）、52ページ。

参考文献

『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（文部科学省、平成27年7月）

